

6章に入りましてから、一連のシリーズでの教えを解き明かしております。1節にあります「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい。」というイエス様の教え。この教えが、施し・祈り・断食という、当時のユダヤ社会において代表的な善行として考えられていた三つの事柄において、それぞれ具体的に教えられているわけです。そして、「人からどのように見られているかと考えるのはやめなさい、天の父を見上げなさい、そして地上的な窮屈な心から解き放たれなさい」とイエス様は招いてくださっているわけです。

そういう流れの中ではありますが、今週からしばらくは、今日お読みした9-13節の「主の祈り」を一節ずつ丁寧に解き明かしていきたいと思っています。今日の礼拝でも共に祈りましたが、この「主の祈り」というのは、世界中のほとんどの教派において祈られている、キリスト教会の代表的な祈祷文。カトリックとプロテスタント、あるいはプロテスタントの中でも若干の違いはある。でも世界中で、また2000年前からずっと祈られてきている共通の祈り。

その「主の祈り」の原型である祈りの言葉が、祈りということに関する教えの関連で、「だからこう祈りなさい」と、イエス様によって教えられているわけです。施し、祈り、断食という三つの具体例は、ほとんど同じような構造で語られていますが、この主の祈りのところで明らかに統一感が失われています。どうもここは、祈りがテーマになっているということで、別のところで語られたイエス様の教えを、こうして一つにまとめて編集したのだろうなあと、そんな福音書執筆の裏事情を想像したりするわけですが、しかしたとえそうであったとしても、この9-13節のところを、まるでとってつけたおまけのように扱って、文脈とまったく関係ないものとして読んでいくことはふさわしくないと私は思います。むしろ、この一連のシリーズで問題になっている地上から天へ、人を見ることから神を見ることへという解放のメッセージは、この主の祈りの教えにおいて、一層浮き彫りにされていると思うのです。

主の祈りについてお話しする前に、皆さんにお伝えしたいのは、祈りとはある意味で非常に危険な行為だということです。

前回、7節の御言葉がまだ解き明かしできていませんでした。祈りという行為の危険とはいかなる意味における危険であるかというのは、この7節に明らかにされていると思います。「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思いついでいる。」

異邦人とは、この場合、まことの神を知らぬ人々と言い換えるとわかりやすいと思います。私たちクリスチャンは、聖書においてご自身を啓示されているイエス・キリストの父なる神こそ、まことにして唯一の生ける神であると信じ、この神に祈りをささげます。しかし、祈るのはクリスチャンだけではありません。色んな信仰をもった方がいる。あるいは、私の友人などは自分は無宗教だと言いながら、何かがあると手を組んで祈るといいます。何となくご先祖

を大切にする、何となく初日の出を拝んでみる、そういう「自分を超越するものへの無意識の畏怖」を持つのが一般的日本人の特徴で、かつて私自身も同様でした。

祈るといふのはそういう具合に、人間すべてに共通する普遍的な行為。神のかたちとして創造された人間の霊性、いわば宗教の種というものが誰にも備わっていますから、祈るといふ行為が生じてくる。それは本来、まことの神に向けられるべきものですが、今は、特に日本の国では、多くの方々が違うものに向けて祈りをささげています。人間といふのは、まことの神から背いて離れながらも、それでもやはり神を求めずにはおれません。神のもとで魂の安息を得るまでは、「何か足りない」と根源的なよるべなさを覚えながら、さ迷い続けている生き物です。そういう人間が、知らず知らずのうちにまことの神を求めながら、でもまことの神へと立ち返ることをしないで、めいめい自分勝手に祈っている・・・聖書によれば、そのような人間理解がなされているわけです。

そして、そういうまことの神を知らぬ人々の祈りは、くどくどとしつこいのだと、イエス様は一刀両断されます。くどくどといふのは、単に祈りが長いということだけではないようです。イエス様も何時間も祈られました。時間の長さが問題ではない。

ここでのくどくどとした祈りといふのは、同じフレーズを何度も繰り返すというイメージで、「ナンミョーホーレンゲーキョー」などといふのも含まれてくるかと思います。そういう祈りのどこが問題なのかといへば、そういう祈りといふのは自己満足の宗教的陶醉に陥りやすいということが、まず一ついえると思います。そしてそういう祈りは、いわば神を脅迫するような、願いを聞いてくれるまでは決して譲らぬといったしつこさ、傲慢さに通じて行きます。そこに危険があるのです。インドには「祈りは神々の上にある」ということわざがあるそうですが、私たちは自分の祈りを神よりも上においてはなりません。つまり、祈りによって神を説得しようといひますか、支配しようとしてはいけません。異邦人のくどくどとした祈りといふのは、そういう風にして何度も同じフレーズを繰り返すことで、神をコントロールして、言うことをきかせようとするような祈りです。

こう聞きますとみなさんの多くは、確かにそうだ、そういう祈りはよくないと納得して下さるのではないかと思います。ただ、難しいのはここからです。神をコントロールしようとするような祈りはいけない、本当にその通り、みんなそうやって言うのです。でも、ここが悩ましいところなのですが、祈りといふ行為は、神に言うことを聞かせようとするような、大胆さ、凶々しさから完全に自由になることなど絶対できません。

なにより私たちは、「神よ私の願いを聞いてください」といふ、大胆な祈りを神からゆるされてもいます。詩編の中にも、そういう大胆な祈りがいくつも残されています。いつまで私をほっておかれるのですか、今すぐ憐れんでください、詩篇の詩人たちは大胆に神に迫って、自分のあからさまな願いを思いっきり神にぶつけて、神の御旨を動かそうとします。お行儀よく、「神様のみこころがなりますように」なんて簡単には言いません。非常に凶々しいのです。でもそれが、一つの祈りの模範として詩篇に記録されています。今日のイエス様の教えなどと比

べますと、そういう大胆すぎる祈りは旧約的でよくない祈りだとされがちですが、私はそんな風には思いません。それもまた聖書の教える祈りの大切な側面であります。神に愛される神の子としての大胆さをもって図々しく祈っていいのです。でもその大胆さと、祈りによって神を支配しようとする傲慢とは紙一重のものです。ここが本当に悩ましいところです。

祈りという営みは、とても危険なものだと最初に申し上げました。それは、祈りというのは間違うと、どんどん自分への執着を固めていって、かえって神から思いが離れていく営みになりかねないからです。自分がこうしてほしいという思いがどんどん強くなっていって、神様の自由さえも奪おうとしてしまう。私たちの祈りは、どこまでも罪人の祈りですから、完全に罪から自由な御心になつた祈りなどできません。いつもそういう危険と隣り合わせです。そのことはよく覚えておいたほうがいいと思います。祈りという営みは、本質的にそういう際どい行為なのです。神に心を向けているはずが、気付けば自分の思いでいっぱいになってしまつて、心から神を追い出しているということが起こりうるのです。

このように、祈りというのはある意味で危険な営みでありまして、私たちがめいめい自分勝手に祈っていては、簡単にその落とし穴にはまりまして、神を見失いかねません。だからこそ、正しい祈りの模範によって導かれる必要があるのです。訓練される必要があるのです。そういう模範として与えられているのが、この「主の祈り」です。これはイエス様が与えてくださった、お祈りの手本です。自分勝手に祈っていては、地上の思いや、自分への執着に固まっていってしまう私たちですから、イエス様は手本を与えてくださって、地上から天へ、人間の思いから神を見ることへと、導いてくださろうとしてくださっているのです。

その内容につきましては、また次回から詳しくとりあげていきますが、今日は残りの時間、そういう「主の祈りの持っている力」ということを考えて終わりたいと思います。今申し上げたこととも重なりますが、三つの要素をあげたいと思います。

① 祈りを変革する力 <最小公倍数にして、最大公約数の祈りとして>

「主の祈り」というのは、私たちが祈りの迷宮に迷い込んでしまわないようにと、イエス様から祈りの道しるべとして与えられているということをお覚えましょう。これは最小公倍数にして最大公約数の祈り、つまり全部詰まっているのです。これだけ祈っていれば大丈夫だし、すべての祈りはここからの展開です。もちろん意味も分からず唱えていれば大丈夫という呪文のようなものではありません。よく理解しないとイケません、でもよく理解したうえで、それを確認しながら祈るなら、毎日これだけ祈っていれば十分です。むしろそのほうが安全といえるかもしれません。

私がおすすめるのは、ハイデルベルク信仰問答における主の祈りの解説です(問 119-129)。日本語では「ということです」と最後にしめられています。原文のドイツ語では、解説が全部祈りのかたちになっているそうです。それを毎日読んでいくだけで、十分な祈りの訓練にな

ります。

そうやって「主の祈り」によって、祈りの訓練をして、祈りに成長していくことはとても大事なことなのです。それが自分の信仰者としてのありかた全体の変化につながるからです。祈りの変化というのは、考え方や、世界観の変化と一体的なものです。祈りが変われば、考え方や世界観も変わります。その逆もしかりです。そしてそれは行動の変化にもつながっていきます。つまり、祈りが変わるとは、人間が変わるということです。

フーストンというオーストラリアの神学者がこんなことを言っています「**私たちがどのような祈りをささげるかは、深いところで私たちが神をどのようなお方として知り、経験してきたかによるのです。**」祈りには、その人の信仰が全部見えるし、人間そのものが見えます。神をどのようなお方として知ってきたか、神とどのような関係を築いて今日まで生きてこられたのか、そういうお一人お一人が信仰の生涯において積み重ねてきたものが、全部祈りに表れてきます。でもそれは逆に言えば、祈りが変わっていくことで、人間が変わっていくということでもあるのです。あるいは、それまで祈りの生活を送っておられない未信者の方にとっては、正しい祈りを覚えることで、それまでの自分が変わるということが起こる。そういう意味では、聖書が示す正しい祈りを覚えていただくということが、キリスト教信仰というものを理解していただくための一番の近道かもしれないとも思います。

祈りというのはそれぐらい大切なのです。ですから「主の祈り」という正しい地図が必要。間違った祈りを模範にすれば、そういう風に、私たちの人間のありようも変わっていつてしまうのです。

②思考を変革する力 <神中心の祈りとして>

これは次回から明らかになってくると思いますが、主の祈りの一番の特徴は、神中心であるということです。この祈りはそういう祈りとして、私たちの視線を転換させてくれます。私たちの考え方を、がらっと変えさせる力をもっています。私がどうしたいかから、天の父はどうしたいと思っておられるかを考えるようになるのです。自己中心の自分さえよければいいという考え方から、神の栄光をあらわすこと、神の国を建てあげることを第一に考える、そういう風に思考を変革する力を持っています。

③生活を変革する力 <イエス・キリストが生きた祈りとして>

そして、祈りがそうやって神中心に変われば、行動も変わらざるを得なくなるものです、これが面白いところです。言行不一致が気持ち悪くなるのですね。それが祈りの力の一つであると思います。

アメリカの演劇集団の台本で、主の祈りを祈っている人に神様がいちいちつつこみを入れるというのがある。ちょっと「御国を来たせたまえ」のくだりを読んでみますね。

人：御国を来たせたまえ、御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ

神：はいストップ！本当にそう思っていますか？

人：本当に？とといいますと・・・？

神：私の王国が到来すること、そして私の意志がなされるということです。

人：ええ、思っていると自分では思っています。

私たちの周りが、もっともっと天国のようになってほしいです。そうしたらみんな幸せだから・・・そうなるように本当に望んでるんですよ。

神：そうですか。ではあなたはそのために何をしていますのですか？

人：私ですか？

神：そう。あなたは私の意志がなされるようにと望んでいる。じゃあそれは、誰の手によってなされると思ってるのですか？

人：いや、でも、神様の王国なんですから、神様がなさる・・・ことじゃ・・・ないの・・・？

神：国民のいない王国はありません。

人：・・・いや、そんなこと考えたことなかったから・・・何をしたらいいのか

神：いいですか、それは難しいことではないのです。あなたが本当になすべきことは、心を尽くして、魂を尽くして、力を尽くして、そして思いを尽くして、私を愛することです。そしてあなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛することです

人：ああ・・・

これを読むと、祈りとはいい加減にはできないと思います。神様に聞かれていることを本当に意識するならば、心にも思っていないことは言えないはずですが。実行できないことを祈ってはいけないということではありません。でも「自分が」その祈りの実現のために用いられることを覚悟しないでは、どうしたって祈りの真実味は薄れる。

そういう意味では、主の祈りを祈るということは、相当の覚悟が要ること。一つ一つの言葉を本当に大切にしながら、自分の周りに変化が生まれることを本当に期待して祈らねばならない。神様と語らうというのは、本質的にそういう特別なことでありましょう。

でも、そのようにして、自分と自分の周りに変化が与えられるというのは、私たちにとって喜ばしいことなのです。イエス様は、私のように祈りなさいと、主の祈りを与えてくださいました。主イエスのように祈り、主イエスのように生きる。イエス様のように自由にさわやかに・・・。私たちは、今そのように招かれているのです。